

IV-349

高齢者に配慮した歩道の歩車分離形態に関する基礎的研究

いわき市 正会員 鈴木 司
 茨城大学工学部 正会員 山田 稔
 茨城大学工学部 正会員 山形 耕一

1. はじめに

高齢者の社会参加を促進させる視点から歩行環境整備を考える場合、客観的な事故危険度を抑制するだけでなく、利用者の主観的な利便性や整備に対する親しみやすさへの配慮も重要と考えられる。さらに、限られた財源下での整備方針を決める際に住民の意向を把握しておくことも重要である。

そこで、本研究においては、車道の路側に設置される歩道の、特に歩車分離の形態を対象として、高齢層を中心に意識調査を行い、物理的整備に対する評価を明らかにすることを目的とした。

2. 調査の概要

平成9年12月に茨城県日立市内で訪問留置きにより概ね50歳以上の個人を対象に、歩行環境整備全般に関するアンケート調査を実施した。ここではその中の、提示した5種類の歩車分離形態に対する5段階評価の結果と、年齢、性別、通常の移動手段、外出時の身体的困難についての回答結果を用いる。

提示した路側歩道の歩車分離の形態は、(1)白線が引いてあるだけのもの、(2)コンクリートブロックで分離されたいわゆるフラット歩道、(3)ガードレールによる分離、(4)マウントアップ型歩道、(5)ガードレール併設のマウントアップ型歩道の5つで、説明文とCGで作成した写真を調査票に掲載した。各々に対し「十分に満足」「満足」「普通」「もの足りない」「とても不満」の5段階で評価を尋ねた。

272世帯449票の配布に対し427票を回収し、回収率は95.1%であった。

3. 歩車分離形態に対する評価

図-1は、5段階の評価の良い方から順に2~-2の得点を割り当て、年齢別に得点平均を算出した結果である。白線が最も評価が低く、次いでブロックによる分離とマウントアップ型歩道が同程度であり、ガードレールを伴う物が最も高い評価となった。年

齢間で比較すると、年齢が高くなるほど評価の絶対値がやや高くなる傾向にあるが、形態別では、75歳以上でブロックとガードレールのみは相対的にやや低くなり、マウントアップのあるものが相対的に高く評価される傾向が見られる。

4. マウントアップ歩道に対する評価

バリアフリーの観点からは、マウントアップ型の

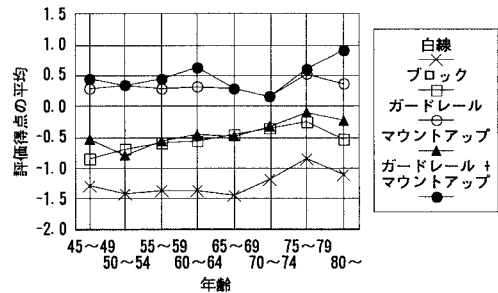


図-1 年齢層別の各整備形態の評価得点の平均

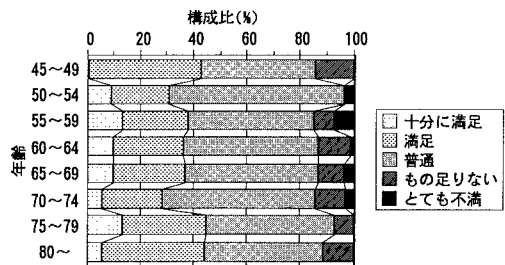


図-2 年齢層別のガードレールによる分離の評価

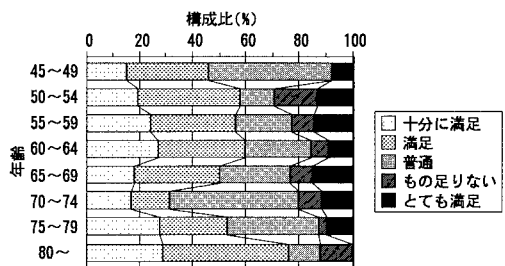


図-3 年齢層別のガードレール併設のマウントアップ型歩道の評価

キーワード：高齢歩行者、歩道、歩車分離、施設整備、意識調査

〒316-8511 茨城大学工学部都市システム工学科 Tel.0294-35-6101 Fax.0294-35-8146

歩道よりも段差のない形態の方が望ましいと考えられているが、今回の意識調査の結果では、平均的には高齢になるほどマウントアップ型の評価が高い結果となった。そこで、この節では5段階評価の結果を点数化しない分析を行った。

図-2と図-3は、それぞれ、ガードレールのみと、ガードレール併設のマウントアップ型歩道に対する年齢層別の評価結果である。どの年齢層でもガードレールを併設した方が「十分に満足」「満足」の割合が高くなっている。しかし一方で「とても不満」の割合もマウントアップ型の方が高く、1割程度存在していることがわかる。

「とても不満」とする割合を年齢間で比較した場合、さほど大きな違いは見られない。65～69歳で他の年齢層よりやや高く、それ以上の年齢層の方が低くなっていることがわかる。

マウントアップ型に対して安全性や安心感から高く評価している人と、逆に段差があることに対する不満を示している人とが存在していると考えられるが、次に、ガードレールのないマウントアップ型歩道の評価結果と比較することで、この傾向をさらに確認することとした。図-4は、ガードレールのないマウントアップ型歩道に対する5段階評価と、ガードレール併設のマウントアップ型歩道の評価とのクロス分析の結果である。この図からわかるように極めて高い相関が見られることから、マウントアップという形態そのものに対して高い評価をする人と不満を感じる人とに分かれることがわかる。

ガードレール併設のマウントアップ型歩道に対して「とても不満」と答えた人の割合を、年齢以外の属性別に分析した。

図-5は、外出時の主な移動手段でみたものである。移動手段は多重回答形式で尋ねたが、ここでは、徒歩、自動車、自転車等それ以外の3つに大別し、その組合わせで4分類した。これを見ると、「徒歩と自転車等」でマウントアップ型を不満に感じる人の割合が高く、次いで、「徒歩と車」であり、「徒歩のみ」「車のみ」では低いことがわかる。自転車車で歩道を走る際の不満が表れていると思われるが、一方で、外出活動が積極的な人ほど不満の割合が高いという傾向があるものと考えられる。

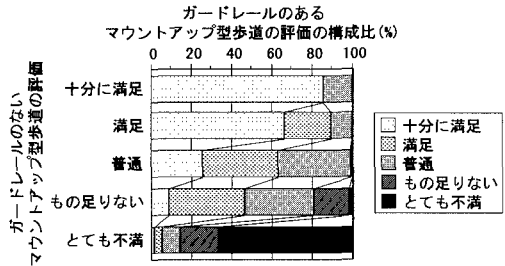


図-4 マウントアップ型歩道の評価のクロス分析結果

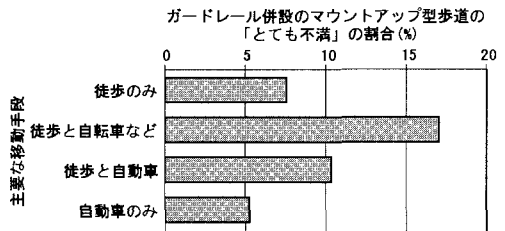


図-5 移動手段別のマウントアップ型への不満の割合

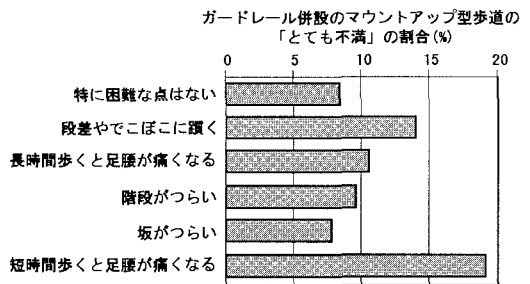


図-6 外出時の身体的困難の有無別の比較

図-6は、外出時の身体的困難別に見たものであるが、「短時間でも歩くと足腰が痛くなる」「段差やでこぼこに躓くことがある」に該当する人で不満の割合が高く、歩行そのものが大きな困難であったり、段差が苦手な人が、マウントアップを不満に感じている関係が明らかになった。

5. おわりに

本研究では、車道の路側に設置される歩道の歩車分離の形態を対象に意識調査を行ったが、その結果ではガードレールが高く評価され、車との分離を強化することが未だ強く求められていることが明らかになった。また、マウントアップ型の歩道の段差を不満に感じる人は全体の1割程度であり、年齢にはあまり影響されないが、移動手段や歩行の困難さが影響していることが確認された。